

本校60周年記念学校ソングを作ろう ー作曲生成AIを用いた創作と活用ー

特別支援学校中学部学習指導要領〈音楽〉においては、音楽の構造や曲想への理解を基盤としながら、音楽表現について考え、主体的に音楽に関わる態度を育成することが求められている（文部科学省，2018）。

これらの目標を踏まえ、本研究では、本校創立60周年を契機として、生徒が自ら学校のよさを見つめ直し、その思いを音楽として表現する活動に着目した。具体的には、生徒が学校ソングの制作に取り組む過程を通して、音楽を創作し活用する楽しさを味わうとともに、歌詞と旋律との関係や曲調の違いに気付き、自身の思いや意図をどのように表現すれば伝わるのかを主体的に考える力の育成を目的とする。

その際、作曲生成AIを創作支援の一手段として活用し、多様な音楽表現に触れる経験を取り入れることで、創作から表現、演出に至る一連の過程を、生徒自身が見通しをもって学ぶことができる授業展開を検討した。本研究で行ったAI利用は、AIリテラシーの要素のうち、特に「AIと協働しながら創造的に問題解決する力」を実践的に体現した。また、作曲生成AIの活用にあたっては、その利便性のみならず、活用上の留意点や倫理的配慮、目的意識の重要性についても扱い、特別支援学校における音楽科授業でのAI活用の可能性と課題について考察する。

<具体化した手順>

- ①60周年記念に対する思いをキーワード化してイメージを膨らませる
- ↓
- ②作りたい学校ソングのイメージについて話し合う
- ↓
- ③作りたい学校ソングの歌詞を考える
(各クラス学級目標を参考にする)
- ↓
- ④作曲生成AI『SUNO』を使って作曲する
- ↓
- ⑤作曲生成AIを用いて作られた曲について、自分たちのイメージに合っているか話し合い、改善する
- ↓
- ⑥創作した曲を、実際に活用する
(歌唱・身体表現・その他行事でのBGMなど)

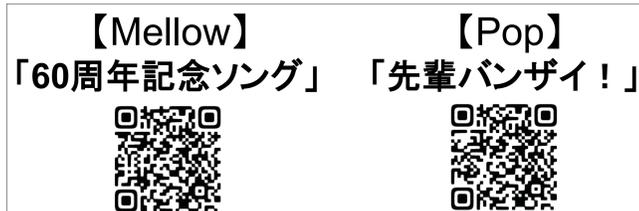
[Verse]
みんなで仲良く
負けたらあかん
優しいハートでかっこいい
先輩バンザイ

[Prechorus]
切り替えピースで笑顔
みんな仲良く楽しいね

[Chorus]
仲間 協力 mellow
きらきらありがとう
ワクワク勉強

[Bridge]
60周年記念ソング
歴史 歩み

『SUNO』で作成した歌詞



完成した60周年記念ソング



授業での話し合いの様子

<考察>

◆作曲生成AIを音楽教育で活用するメリット

- ・楽譜が読めなくてもイメージを音楽にすることができるため、音楽創作活動への生徒たちの興味・関心を高めることができる。
- ・旋律を楽譜上で作曲しなくても曲が作れるため、効率的に創作できるため、さらなる活動に時間を費やした音楽教育へと発展することができる。（今回は、生成AIで作成した音楽を活用して演奏・歌う活動や行事で活用する段階まで行うことが可能となった）
- ・作詞・作曲・鑑賞の授業が一度にできる。
- ・言葉や画像、映像などを音楽へと変換できるため、言語活動や画像の学習などを充実させるなど、発展させることができる。
- ・様々な曲調にすぐに変換できるため、汎用性があり多くの場面で手軽に活用できる。（行事等での演奏・表現・BGM等）
- ・収益を目的としない場合は著作権の問題が発生しないためオリジナル曲として活用や発表することができる。

◆作曲生成AIを音楽教育で活用するデメリット

- ・音楽理論による作曲ではないため音楽理論を学ぶことはできないことから、創作だけが目的である学習には相応しくない。（目的ではなく、手段になることを意識して活用することが求められる）
- ・簡単に創作できるため、目的と活用方法をしっかり選定・精選して取り入れないと遊び感覚になってしまう。

◆文部科学省の見解に基づくAI利用の倫理的可否とAIリテラシーについて

AIの判断をそのまま採用するのではなく、研究者が批判的に検証し、最終判断を行うという姿勢は、文科省が求めるAIリテラシーと整合している。本研究におけるAI利用は、文部科学省のガイドライン、AIリテラシーの観点、そして著作権法の要請に照らして倫理的に妥当な範囲にある。AIは研究者の思考を代替するものではなく、あくまで補助的なツールである。研究者がAIの限界を理解し、批判的に検証しながら活用することでAIは教育研究における新たな価値を生み出す可能性を持つ。今後も、AIの能力とリスクを適切に見極めながら、教育的・倫理的に持続可能な形でAIを活用していくことが求められる。

本研究では、多様なジャンルの音楽に触れ、多様な作曲方法を知ることによって、音楽理論の視点の原点に戻ったり、即興として自ら旋律を生み出したりするなどの作曲そのものに興味・関心を持った生徒もいた。用途に合わせて作曲生成AIを用いない作曲方法と共存していくことも大切だと思われる。自分たちの生活文化や音楽文化、AI活用時代の変遷という一連の軌跡についても積極的に扱い、現代音楽の多様な表現方法や技術について、時代に適応したAIリテラシーや倫理観なども踏まえつつ今後も生徒たちに伝えていきたい。